

月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.
179



たまには(?)

学園モノらしく制服トーク！

み～んな集まれ！ ファルコム学園

英雄伝説 空の軌跡
&
啄木鳥しんきのFalcom日和

Falcomニュース

英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

エステルとヨシュアの旅——再び

『空の軌跡 the 2nd』

2026年全世界同時発売が決定！

FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

2 目次

- 4 2026年全世界同時発売が決定!!
『空の軌跡 the 2nd』
- 6 も～っと集まれ！ ファルコム学園
新久保だいすけ
- 16 ファルコムニュース
- 19 英雄伝説 空の軌跡
啄木鳥しんき
- 55 啄木鳥しんきのFalcom日和
- 56 英雄伝説 零の軌跡
午後の紅茶にお砂糖を
著：むらさきゆきや イラスト：窪茶



2025年に「軌跡」生誕20周年記念として完全フルリメイクされた『空の軌跡 the 1st』から1年。エステルとヨシュアの旅が2026年に再び甦る！遊撃士を目指してリベル王国の各地を巡る中、国を揺るがす大きな出来事に巻き込まれていくエステルたちの活躍を描いた『空の軌跡 the 1st』。その旅路の中で出会う仲間、人々たちと物語を紡いでいく中で明かされる数々の野望、そして真実。そして、『the 1st』の旅は終わりを告げた。『空の軌跡 the 2nd』は、その続編として、遊撃士となったエステルとヨシュアの旅の結末が描かれる。前作でも大好評を得ていた爽快でストレスフリーなバトルシステムはもちろんのこと、今作ではさらにキャラクターの個性を活かしたアクションの強化や、壮大なストーリー演出が待ち受けている。今回、早くもそのティザーサイトとムービーが公開となった。今から新たな旅路に向けて、準備を進めていこう。なお、今作は続編のため、まだ『空の軌跡 the 1st』をプレイ中の人は、ネタバレ要素が含まれているので要注意だ。

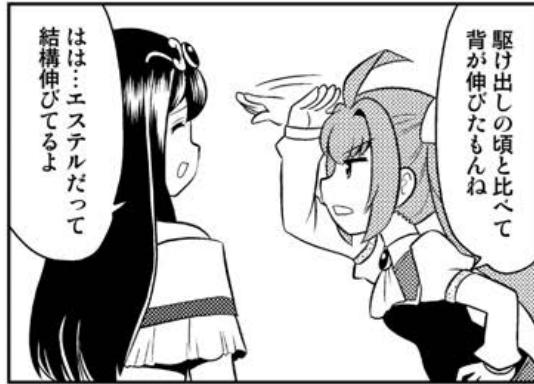


★制服つて着なくなると急に懐れはじめるよね★

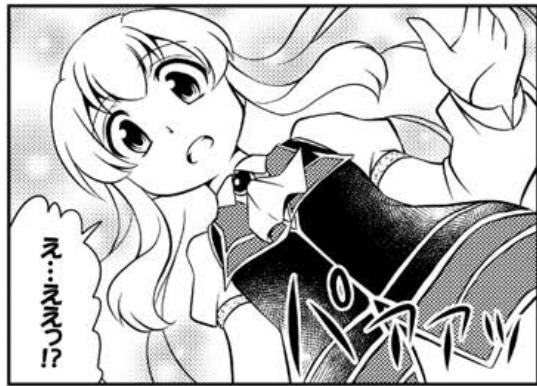
学生な気分



いろんなお楽しみ



髪下ろすのいいよね…



恥ずかしい大人たち



憧れの学生生活



対立の序曲



理事長の野望



制服いろいろ



先生な気分



乙女と制服



潜入するボクつ娘



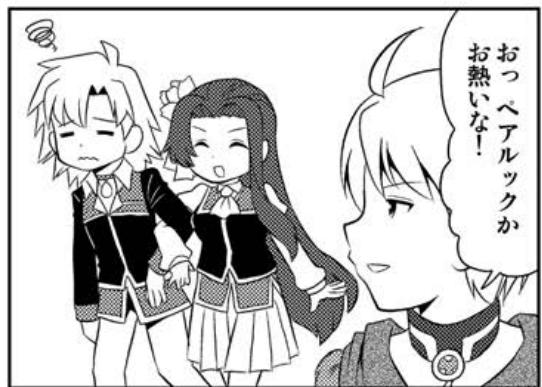
怪人と連帯感



騎神と会長と制服と



爛れた四角関係





日本ファルコム創業40周年を余裕で超えて、尽きることなく怒涛の勢いでニューカマーが押し寄せるファルコム学園！いつまで続くのかこの進撃！そして天才・新久保だいすけに果たして限界はあるのか!? 様々な難問に挑戦し続けるご存知“ファル学”第4巻！

実は、計10冊目の 『ファルコム学園』！

も～っと集まれ！
ファルコム学園 4

新久保だいすけ
定価：本体 909 円+税
ISBN 978-4-8021-3387-6

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

『空の軌跡 the 1st』『界の軌跡』グッズ発売！

Yahoo!ショッピングのオフィシャル俱楽部MAGにおいて、「空の軌跡 the 1st」「英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-」の新グッズが登場。



■発売元：株式会社ヴィータ・ソリューションズ

特設ページ https://store.shopping.yahoo.co.jp/ofc-mag/falcom.html?sc_j=shopping-pc-web-category-storeitm-sort_mdl-sortitem&X=99

<Falcom jdk BAND LIVE 2026>開催決定！

主題歌『星の在り処』「空の軌跡 the 1st」バージョン世界初生演奏!!

2026年2月7日(土)、東京・赤羽ReNY alphaでフルライブ開催決定。ライブ開場前の2時間はフリー入場の物販もOPEN。ライブチケットをお持ちでない方もご利用いただけます。

全曲新アレンジ・新録音で贈るFalcom 45周年記念アルバム『Falcom アクースティックス 3』を会場にて先行発売！



チケット好評発売中！

■日時：2026年2月7日(土) 開場16:30／開演17:30

※開場前のフリー入場物販 14:00～16:00

■会場：赤羽ReNY alpha (JR赤羽駅 東口より徒歩1分)

特設サイト

<https://www.falcom.co.jp/jdk/2026/>

全曲新アレンジ・新録音で贈る Falcom 45周年記念アルバム 『Falcom アクースティックス 3』3月9日発売！

「ソーサリアン」のボーカルナンバー『Josephine』や「イースII」の代表曲『LILIA』、『XANADU』の『LA VALSE POUR XANADU』といった数々の名曲を新規アレンジ。

さらに、ボーナストラックとして「奇跡の軌跡VI Falcom jdk BAND LIVE ASIA TOUR 2025」のために編曲・収録された『星の在り処』のJapanese ver./Chinese ver.を収録！

ゲームミュージックファンだけでなく、音楽を楽しむすべての人に聴いていただきたい、という想いを込めて制作した『Falcom アクースティックス3』。耳元で演奏してくれているような“リアルな音”をぜひこの機会に体感してください。

■発売日：2025年3月9日



falcomショップ

<https://falcom.shop/products/detail/767>

►Falcomニュース◀

Falcomファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

FalcomのLINE絵文字第6弾「ポム」発売！

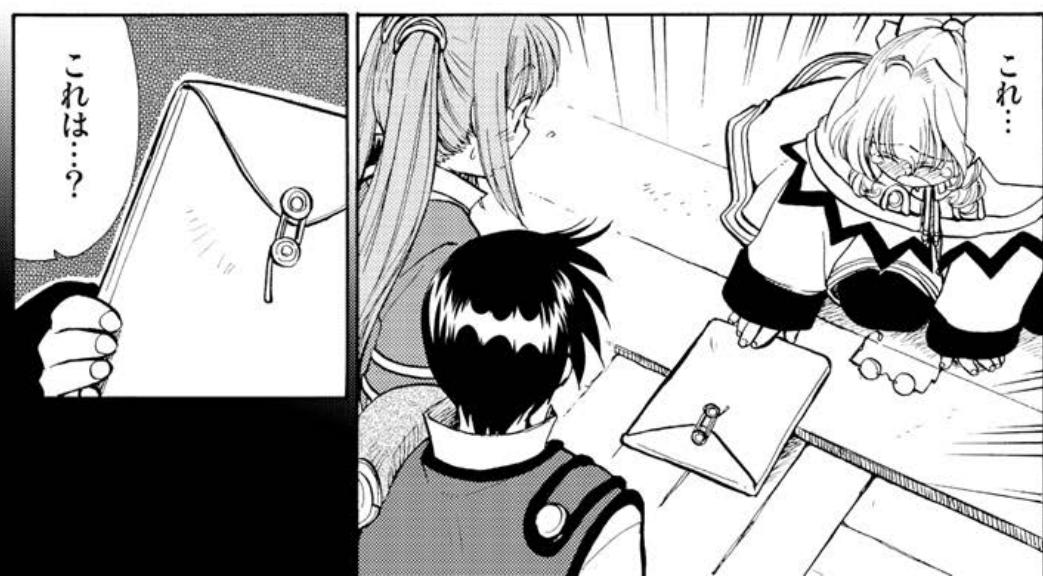
軌跡シリーズに登場する魔獣「ポム」がLINE絵文字になりました！



スタンプ

<https://store.line.me/emojishop/product/6915893f0e2a9a7c4393f042/ja>

“輝く環”を目指す一行の前に結社《身喰らう蛇》の執行者たちが次々と現れる。
エステルとヨシュア、アガットの前に立ちはだかる《剣帝》レオンハルト。
かつて兄と弟のように育ったレー・ヴェとヨシュアが、万感の思いを込め剣を交える！



空の軌跡、ここに完結！

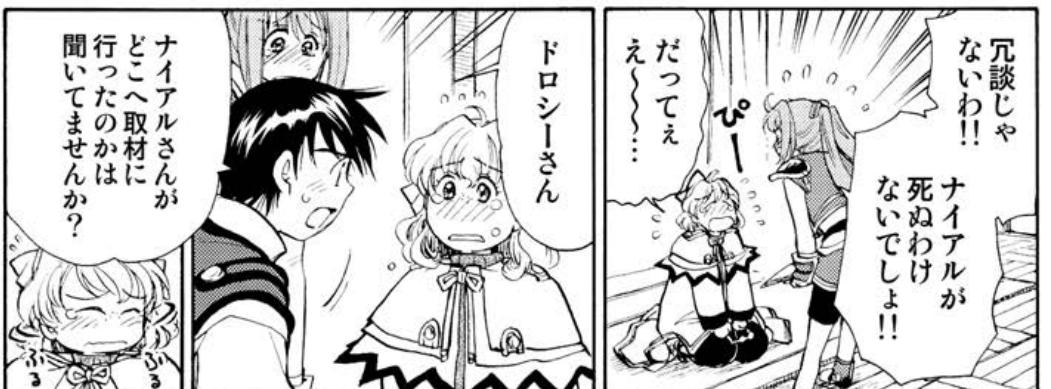
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～⑦

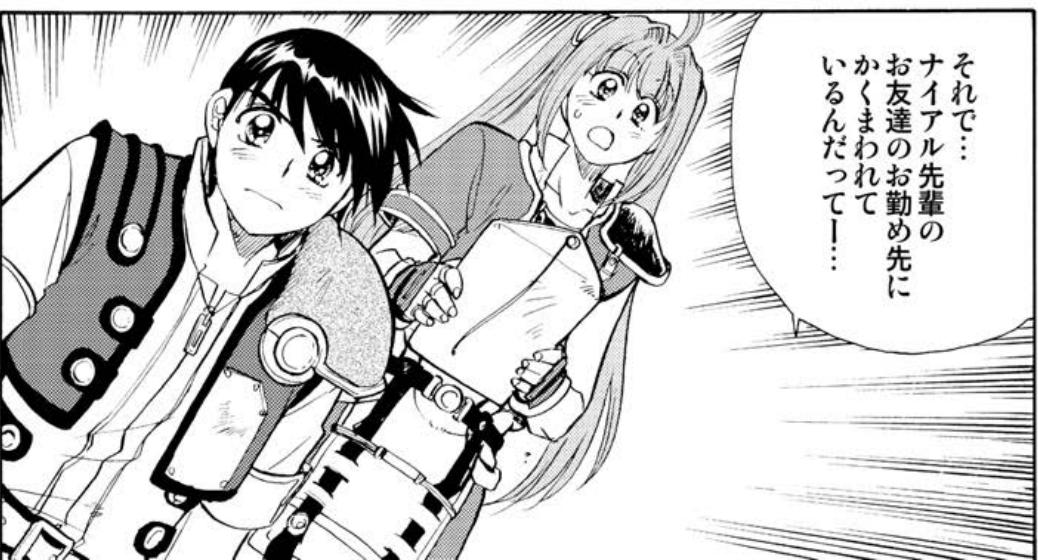
啄木鳥しんき

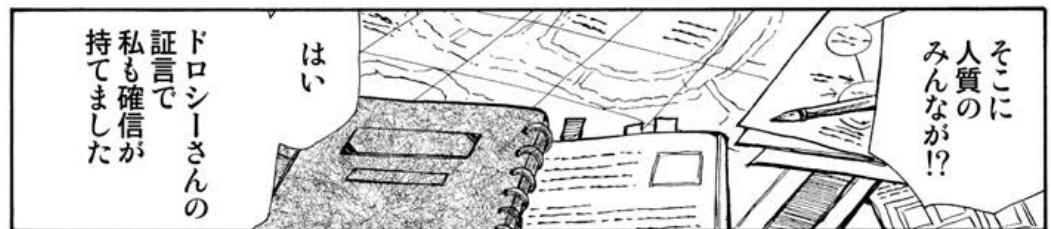
定価:1,210円(本体1,100円+税) ISBN 978-4-8021-3516-0

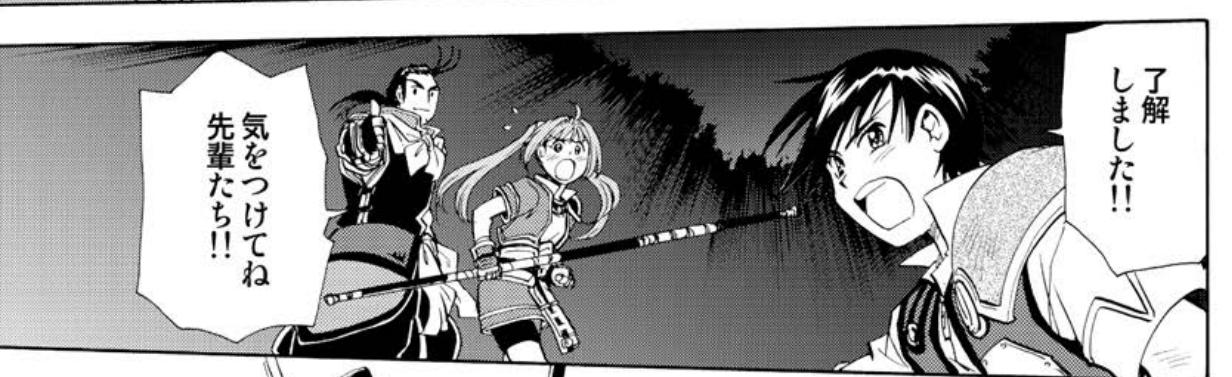
発行:フィールドワイ 発売:メディアバル

©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y









この作戦で
一番大変なのは



では、いざ!!

参る!!



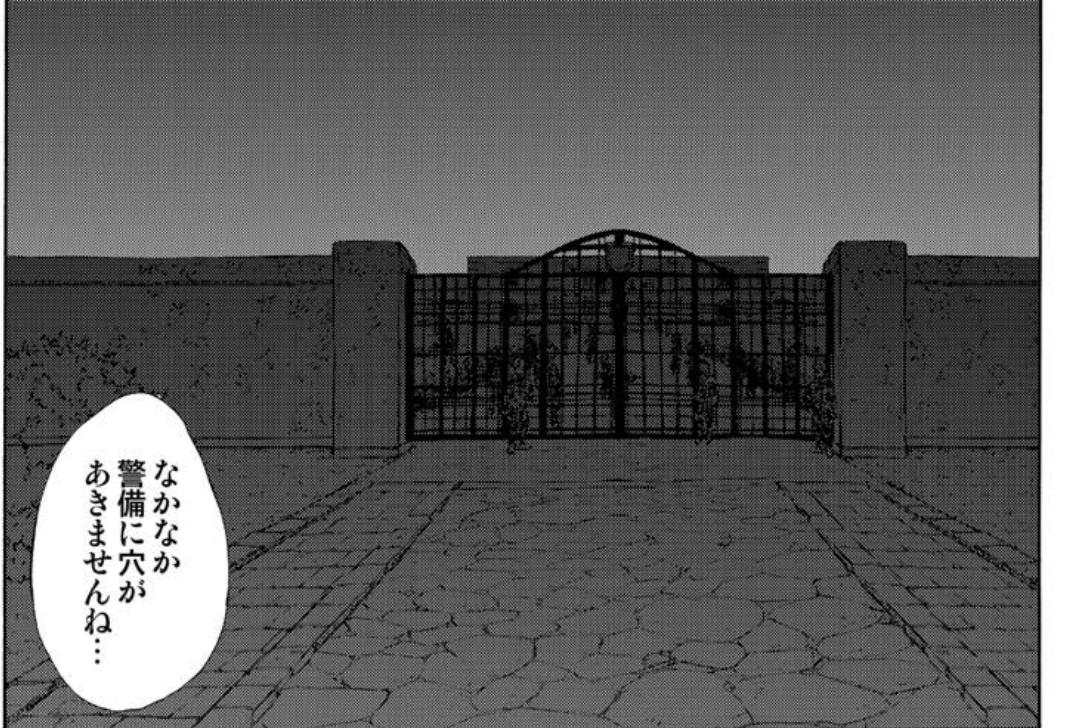
新人君たちも
作戦通りに
頼んだよ!!



人の心配なんて
して余裕があるのかい?!

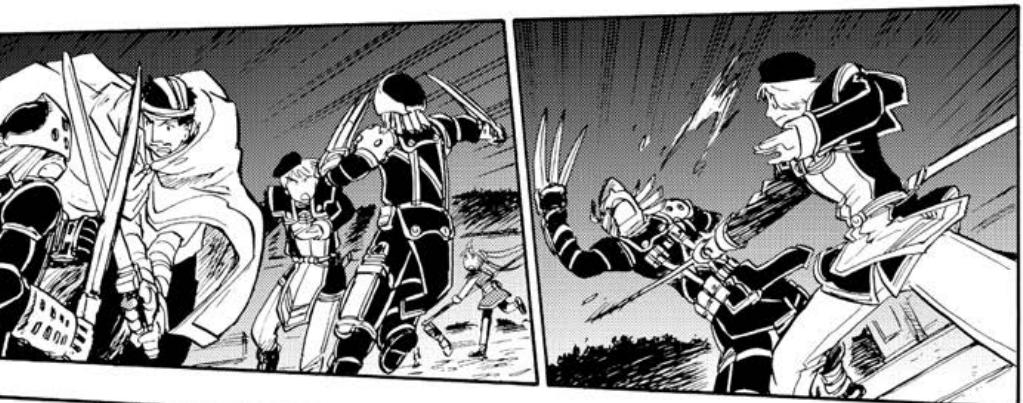
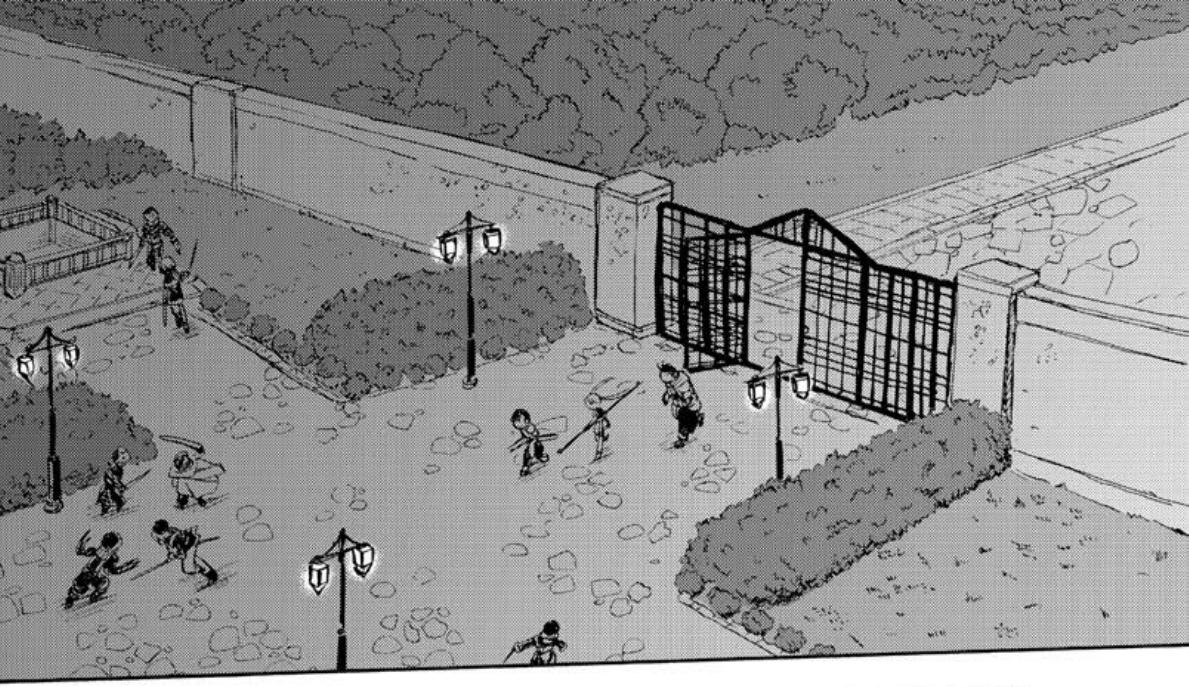
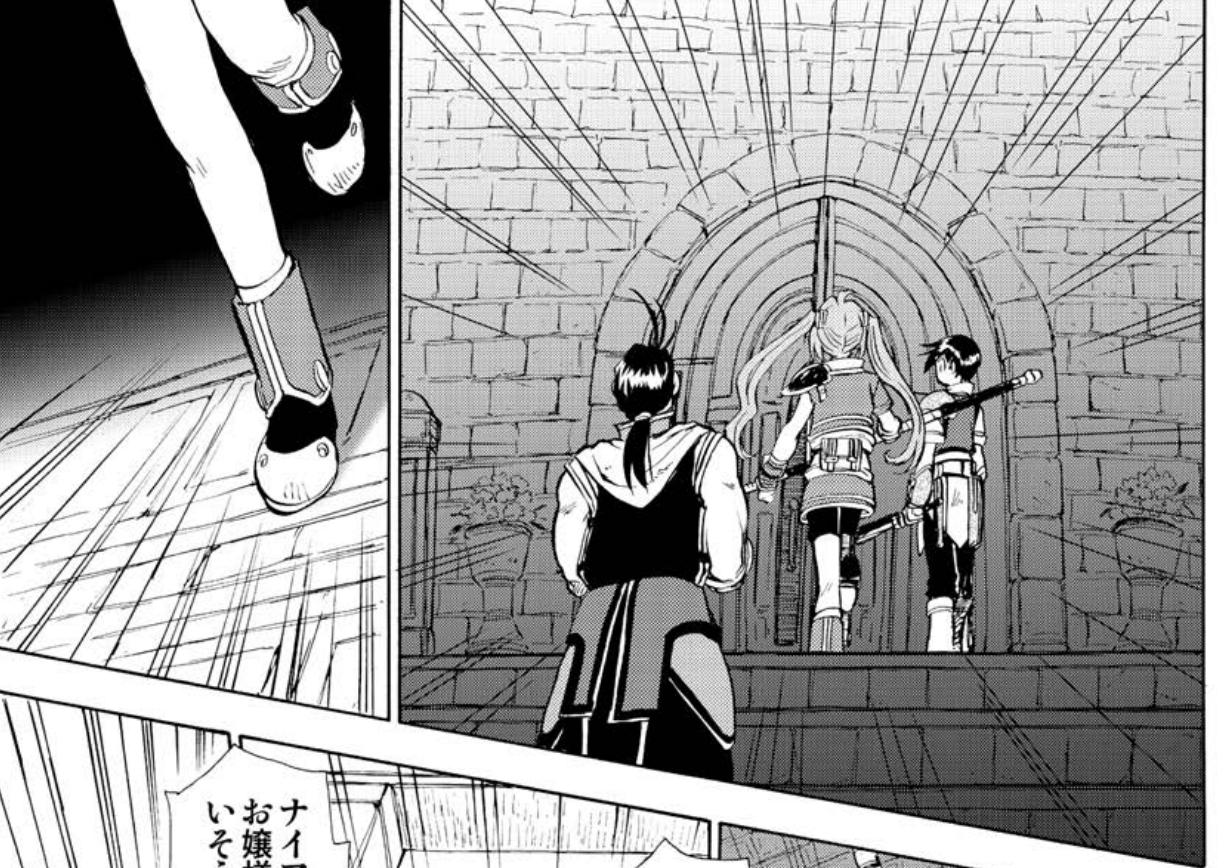
先輩達4人だけで
見張りの黒装束を
やつつけるなんて

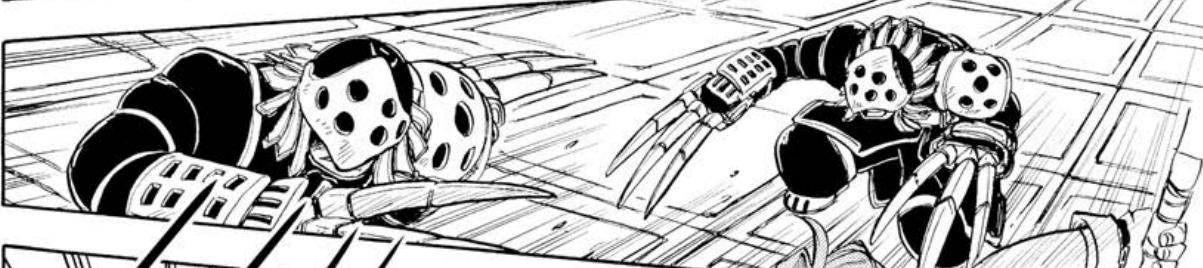










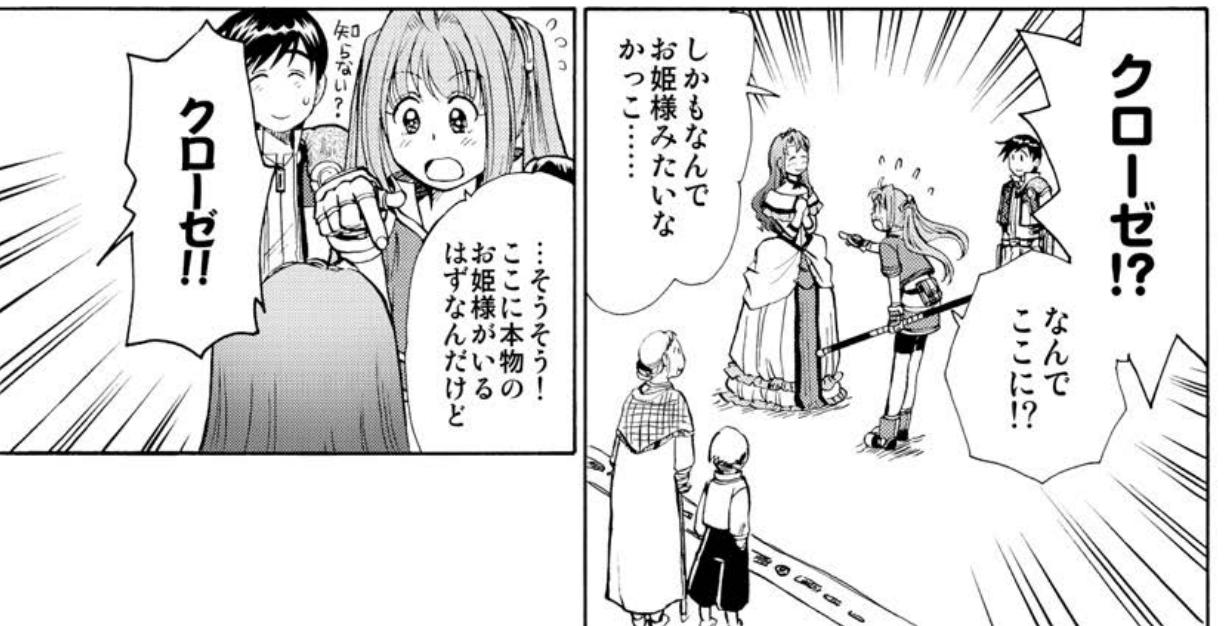


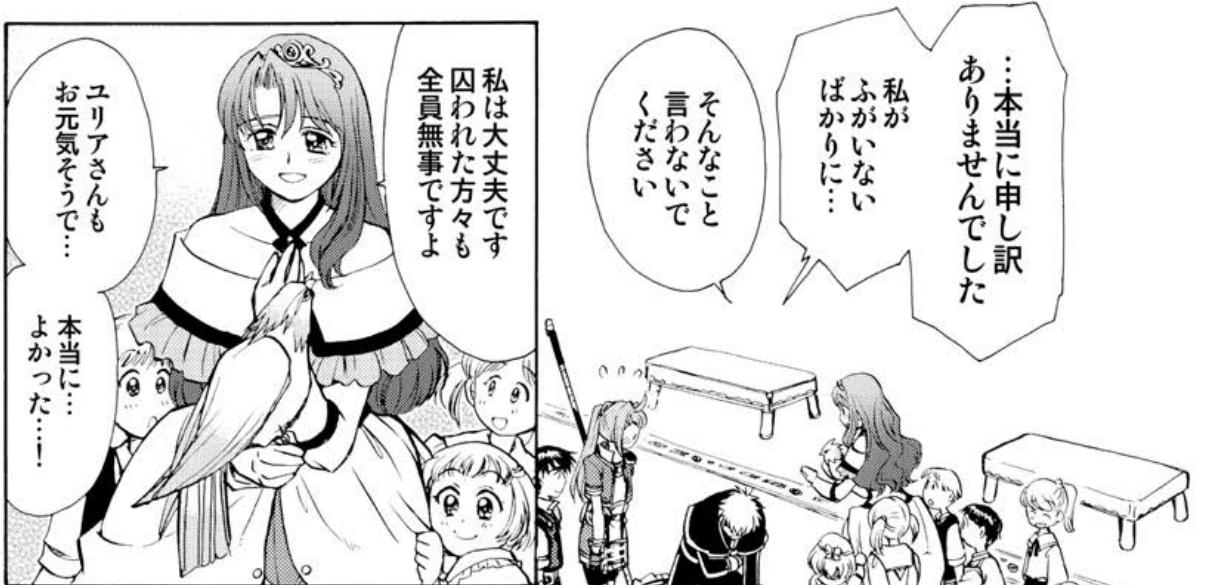


俺はここで特務兵を食い止めておく!!

















英雄伝説 零の軌跡

午後の紅茶にお砂糖を♪

特務支援課メンバーが過ごす

クロスベル自治州のゆる~い(?)日常!



第7回

©YUKIYA MURASAKI, KUBOCHA

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、
自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、
『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』において
も激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく
立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバ
ーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしてい
たかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！



「どうしたのかしら？ いつもより待ってる人が多いみたいだけれど……」
エリイが首をかしげた。

列の先頭にならんでいる青年が、こちらに気づいて声をあげる。

「おお！ あんたら、支援課だろ!? なんとかしてくれよ！」

ロイドたちは駆け寄った。

「どうかしましたか？」

「時間を過ぎても、バスが来ないんだよ！ こっちは仕事があるってのに！」
他のならんでいる人たちも口々に文句を言いだした。

落ち着いてください、すぐ調べます——とロイドは請け負う。

あつ、とティオが指を差した。

「ヨアヒム先生です」

最初は気づかなかつたが、列の最後尾にならんでいる白衣の男は——医師のヨアヒムだつた。

「いやー、君たち、こんなところで会うなんて奇遇だね」

「ここにちは！ こちらにいらしたんですか、ヨアヒム先生」

「ん？ その様子だと、僕に用事があるのかな？」

「はい。ウルスラ病院から『マインツへの到着が遅れているようだから様子を見てきて欲しい』と依頼されまして」

ヨアヒムが苦笑する。

「いやー、まいったな……ちょっと、いいポイントを見つけちゃつたものでね」

「やつぱり、釣りをしてたんですか……」

「こればかりは、やめられなくてね！ だけど、健康診断は研修医のリットン君に任せたから大丈夫のはずなんだけれどね……行つてないのかい？」

「え？ 先に向かつたんですか？」

「いくら僕が釣り好きとはいえ、忙しい鉱夫たちを待たせるわけにはいかないからね。リッ

トン君に『いいかね、今から君に研修課題を出すよ——マインツで健康診断をして、その結果をレポートとして提出したまえ』と……」

ロイドたち全員が呆れていた。

やれやれ、とヨアヒムが首を左右に振る。

「研修医ともなれば、それくらいやれなくてはね。まったく困つたものだよ」

「……困つたもののは、ヨアヒム先生のほうかと」
ぼそり、とティオがつぶやいた。

ロイドは少し考えて——

「徒歩で行つてみるしかないな」

と結論づけた。

エリイが観念したように、うなづく。

「導力バスが故障したのかもしれないものね。乗客は外に出なければ安全だと思うけど、動けなくなつていてるかもしれないわ」

「……そうですね。今のわたしたちであれば、問題なくクロスベルかマインツへ護衛できるかと。街道には、さほど強い魔獣はいませんから」

ティオの言うとおりだろう。

ランディもうなづく。

「ふい、しゃあねえな！ マインツまでだと、けつこうな距離になっちゃうが、体力つけるには、ちょうどいいハイキングになるだろ！」

「はは……そうだな。警察学校でのサバイバル訓練を思い出すよ」

「俺も警備隊を思い出すぜ」

意気投合するロイドとランディに対し、エリイとティオは歩きはじめる前から疲れたような顔をしていた。

リーシャは、ずっと嫌な予感を抱えていた。

徒歩で行くと決めたロイドが、こちらへと視線を向ける。

彼は丁寧に頭を下げた。

「すまない、リーシャ、シュリ……トラブルが起きたようだ。バスは来ないし、今日はここで——」

「私も行きます！」

「えっ!?」

リーシャは真剣な口調で告げた。ロイドたちだけでなく、シュリまで驚いて目を丸くする。

「なんでだよ、リーシャ姉!? そんなにマインツに行きたいのか!?」

「いえ、そういうわけじゃなくて……あの、その……直感というか……」
(ああ、どう説明したら……!?)

リーシャは苦悩する。

ロイドがうなつた。

「うん、街道なら徒歩でも危険は少ないとと思う……でも、どうしてそんなに行きたいんだ？ マインツに用事があるわけじゃないんだろ？」
「それは……悪い予感というか……」

「え？」

リーシャは頭をかかえる。『銀としての直感が、危険を察知しているのでな』と言えた
ら楽なのだが、そんなことは、寝言でも口走れない。

しかし、放つてもおけない気持ちだった。
意を決して——

「ううう……あ、あの！ 私、ダイエット中だから、ちょうどいいかなと思いまして！
ハイキングとか、体力もつきそうですし！」

「ダ、ダイエット？」

ぽかん、としてるロイドに対し——

ハツ、とシユリが顔色を変えた。

「体力!? そういうことか、リーシャ姉！ おい、オレも行くぜ」

「シユリまで!」

「イリアさんに、『早々にへばるんじゃないわよ?』って言われたんだ。それって、オレに体力がないって意味だろ!?」

「まあ……そう取れなくもないと思うけど……」

「うん、とシユリがうなづく。

「なるほど、ハイキングか。これぞ、有意義な休日の使い方って感じだよな。劇場の中じやできないことだ」

「待つてくれ、シユリ……」こから、マインツまでは、かなりの距離がある。子どもの足では――」

「はあ？ オレは毎日、アルカンシェルで特訓を受けてるんだぞ。そこのチビッコよりは歩ける自信があるぜ」

いきなり天秤に掛けられたティオが、口をへの字に曲げる。

「……もしかして、チビッコというのは、わたしのことでしょうか？ 非常に不本意なのですが」

「とにかく、あんたたちと一緒に安全なんだろ？ なら、いいじゃんか」

押し問答していると、バスを待っている人たちが、ざわつきはじめた。「イリアさん？」「アルカンシェル？」「あれって、リーシャ・マオじや？」「まさか。スターがマインツなんて行くわけないだろ」「でも……似てるよなあ……？」エリイがロイドに耳打ちする。

「ちよつと、まずいわよ？ 騒ぎになっちゃうわ」

ティオもささやいた。

「ロイドさん……置いて行きましょう」

「まあ、行きたいって言うなら、いいんじやねえの？ このふたりなら、『途中で休憩』なんて言い出さないだらうし……道中の安全は、このランディ・オルランドにすべて任せなさいって！」

魔獣のマの字もないような場所だというのに、巨大なスタンハルバードをぶんぶんと振り回す。

シユリが肩をくすぐった。

「まあ、ダメだつて言うなら、リーシャ姉とふたりで勝手に行くけどな」

街道を徒步で行くことが禁止されているわけではない。

ロイドが降参した。

「はあ～、仕方ない……ただし、安全第一だ。俺たちの言うことは聞いてもらうからな」

「いいけど、変なこと命令するなよ?」

「するわけないだろ!?」

ペコリ、とリーシャは頭をさげる。

「すみません、ロイドさん。わがままを言つてしまつて……シユリちゃんのことは、私が面倒を見ますから」

「うん。俺たちも気をつけるけど、よろしく頼むよ」

「はい……」

リーシャは、シユリと一緒になければ、ひとまずロイドたちと分かれ、『銀』の姿になつてから追いかけることもできたのだが。

(ううん……シユリちゃんのことは、イリアさんに頼まれたんだから)

ぐつと気を引き締める。

(なにが待つてゐるかはわからないけれど、私が、シユリちゃんもロイドたちも守らなないと!!)

「おお、リーシャ姉が真剣だ……やっぱりハイキングって、効果的な練習なんだな」

いろいろとシユリに誤解されている気がした。

できるだけ急いだほうがいいのは間違いないが、到着したときにバテバテでは意味がない。

ロイドは、魔獣との接触を避けつつ、みんなの調子を気にしながら進んでいった。

最初はシユリのことを一番心配していたが、すぐに大丈夫だとわかった。

アルカンシェルのふたりは充分に健脚らしい。

むしろ、大きな魔導杖オーバルスタッフを持つてゐるティオのほうが、大変そうだった。

「すこし休憩しようか?」

「……問題、ありません……はあ、ふう……このくらい、へっちゃらです」

「うーん、そうか。無理はしないでくれよ、ティオ」

「もちろんです、ロイドさん……はふつ……」

山の中を進んでいた一行だが、ぐるりと左へ曲がったところで、視界が開けた。

マインツの山々を眺めることができた。

「すごい……」

シユリが立ち止まり、その景色に目を奪っていた。

その横にリーシャもならんで、うなづく。

「街を少し出るだけで、こんなにも素敵な場所があるのね」

「ん？ リーシャ姉は知つてたんだろ？」

「ゆっくり立ち止まつたことはないから……」

「あ、そうか……こんなところ、ふつうなら徒歩で来ないもんな」

「ロイドさんたちに感謝しないと……あ！ ごめんなさい、つい見入つてしまつて」

「いや、そろそろ休憩しようと思つてたから、ちょうどいいよ。だいぶハイペースで來たからな」

ティオは魔導杖を支えにして、なんとか、しゃがみこむのに耐えていた。

エリイのほうも、汗をハンカチでぬぐつている。

ランディは重たいスタンハルバードを担いで、まだ余裕がありそうだつた。それとなく、

周囲を警戒してくれている。

「バス、見かけなかつたなあ？」

「トラブルから回復して、もうマインツに向かつたのかもしれないな」

「ちよいと楽観的な気もするけど、意外とそんなとこもな」

ランディが肩をゆすつて笑う。

ティオが魔導杖を掲げた。

「見晴らしもいい場所ですし、付近をサーチしてみます」

「もう大丈夫なのか？」

「……わたしは、最初から問題ありません。子ども扱いされるのは心外です」

シユリを意識しているのか、いつも以上にティオが意地を張つていて。
すこし心配になるロイドだったが、ここは信頼することにした。

「じゃあ、頼むよ」

「はい……」

ティオがうなづくと、シユリが物珍しそうに尋ねてくる。

「なんだ？ なんかやるのか？」

「だ、だめよ、シユリちゃん……お仕事の邪魔をしたら」

リーシャがたしなめた。

とはいえるにをするかくらい教えてあげてもかまわないだろう。

「ティオは特別なセンサーを持つていて、その感度を高めることで、かなり遠くのことも把握できるんだ」

「マジかよ!! すげえじやん！ ただのチビッコじやなかつたんだな！」

シユリが瞳を輝かせて賞賛した。

魔導杖を構えたまま、ティオが赤面する。

「こ、これくらい……どつてことありません……」

ちょっとびり得意そうな様子に、ロイドたちは苦笑してしまつた。

おほん、とティオが、わざとらしく可愛い咳払いをする。

「……すこしだけ、静かにしていてください」

「おう、わかつた！」

うなずくと、シュリは両手で口元を押さえた。

他のメンバーも固唾を呑んで見守る。

風の音と、鳥の鳴く声がした。

「アクセス。……感度、最大……付近をサーチします……」

ティオの髪飾りの三角部分が、赤く明滅はじめめる。

魔法陣が浮かび上がった。

穏やかな青白い輝きが、彼女を包んだ。

そして――

「ツ!?」

「ティオ、なにかわかつたのか?」

「この先で、魔獣が戦っている音がしました！ それと、金属音も……」

「なんだって!?」

「距離は、20セルジュほどかと」

「それなら一息に走れるな……行こう、みんな！」

「はい」

「わかつたわ！」

「おっしゃ、急ごうぜ！」

ロイドの呼びかけに、ティオ、エリイ、ランディが声をあげた。

リーシャとシュリもついてくる。

「シリちゃん、魔獣がいたら、絶対に私から離れないで」

「わかつてるつて！」

ほどなく、ロイドたちの耳にも、戦いの音が聞こえてきた。

白煙をあげている。

ガシャン！ ガシャン！ と金属音がしていた。

ロイドは目を見張る。

「魔獣だ！」

停留所の手前、吊り橋をくぐった直後の場所に、バスの姿があつた。

あんなところで停まる予定はないはずだ。

白煙をあげている。



「でかいぞ！ よりによつて、バスを攻撃してやがる！」

ランディがスタンハルバードを構えた。

バスのなかで乗客が助けを求めていたのが、窓越しに見えた。

たちこめる白煙のせいで、その顔まではわからないが……

ティオが警告する。

「バスの導力機関が燃えているようですが……車内に火が移る可能性もあり、そのまま乗つているのは危険かと！」

「バスを壊すなんて……街道の魔獸とは思えないわ……」

エリイが緊張した声をあげた。

ロイドは思考を巡らせる。

バスの乗客の安全が最優先だが、そのためには魔獸を遠ざけなくては。「まず、魔獸を引き離す！ それから、バスの乗客を避難させるんだ！」

自分とランディが魔獸と戦い、ティオとエリイに乗客の誘導をしてもらおう——そう指示しようとしたとき、後ろからリーシャの声がした。

「ロイドさん！ 私たちがバスに乗ってる人たちを避難させます！」

「えっ!?」

「あの魔獸、手加減できる相手じゃありません！」

「わ、わかった……頼む、リーシャ！」

ロイドは仲間全員で、魔獸へと向かつた。

リーシャが魔獸の強さを感じ取った理由はわからない。

しかし、バスを破壊してしまうほどの魔獸だ。かなり危険な相手なのは間違いかつた。

その魔獸は、紫色の頭を持ち、筋肉の塊のような身体を上半身だけ、地面の穴から出していた。

見えていた上半身だけでも、ロイドより大きい。

全身を硬そうな体毛で覆つており、所々に棘のような長い毛が生えている。

なにより特徴的なのは、両手に備わった巨大な爪だった。

一本一本が剣のように鋭く太く長い。

その凶悪な爪で、バスの外装を破壊し、導力機関まで傷つけたようだ。

ロイドは注意を引きつけるべく、武器で殴りつける。

「さあ、かかるとい！」

「歯応えありそじやねえか!!」

同じように、ランディも打撃を加えた。

頑強だ。さほど効いた様子はない。

それでも、自分たちへ魔獸の意識を向けさせることはできた。

バスから遠ざける。

ティオが魔導杖を突き出し、《アナライザー》を使う。

センサーを集中させて敵の情報を収集する、彼女の得意技だった。

「なつ!! これは、グランドリューではあります……危険度、大……手強いです」

以前、同じタイプの魔獣とは戦ったことがあるが、これほど強くはなかった。

人間にも強い弱いがあるように、個体差があるのだろう。

得られた情報をティオが数値化して教えてくれる。

ロイドたちに戦慄が走った。

「そんなに強いのか!?」

「やばいぜ、ロイド……準備なしに戦える相手じゃない」

「くつ……」

「でも、まだ避難は終わってないわ！」

エリイの言うとおりだ。

リーシャとシユリが、バスの中に声をかけ、今、ようやくハッチが開けられたところだった。

白衣の青年と、看護師姿の女性が降りてくる。

「ロイド!! ロイドなの……!?」

「セシル姉!!」

バスに乗っていたのは、ロイドの姉のセシルと、研修医のリットンだった。

「ひ〜!! た、た、たすけて〜!!」

「セシルさん！ 今は、避難してください……!!」

「えつ!! リーシャさん!!」

「理由あつて手伝っています！ さあ、急いで避難を！」

「そ、そうね！」

リーシャにうながされ、セシルがうなずく。

運転手も降りてきた。

「あ、ありがとうございます！ バスに乗ってたのは、これで全員です！」

「急いで逃げてください！」

「はい！ つて……リーシャ・マオ!!」

どうやら、誘導は彼女たちに任せておいても大丈夫そうだ。

ロイドは魔獣に意識を戻す。

グランドリューが、ぐんっと身体を反りかえらせる。

「グオオオオオオオオオオオオオオ〜〜〜〜〜〜〜〜!!」

恐ろしい雄叫びをあげる。

リットンが、腰を抜かしてしまった。

「ひつ……ひいいい／＼!?」

「しつかりしてください、リットンさん！」

セシルに叱咤され、シユリに引っ張られて、彼は倒けつ転びつ逃げはじめる。

「さあ、運転手さんも早く！」

「は、はい！」

リーシャに言われて、バスの運転手も走りだした。

街道をクロスベル方向へ逃げていく。

あとは、この魔獣を退治できれば、大丈夫だ。

「みんな！ 全力でいくぞ！」

「わかつたわ！」

「おう、任せろ！」

「いきます……」

ティオが魔導杖の先端を、グランドリューに向けた。

「……ガンナーモード、起動します……オーバルドライバー、出力最大……エーテル、バスター!!」

青白い閃光がほとばしる。

まぶしくて、目を開けていられないほど。

轟音が鳴りひびいた。

ティオの切り札であり、ロイドたちが使えるなかで、最も威力のある攻撃だ。

ところが、ティオが息を呑む。

「……ッ!? 敵、反応あり！ しかも……そんな……」

ロイドは自分の目を疑ってしまう。

「なんだと?!!」

巻きあがった土煙が晴れたとき、そこには、さらに三体のグランドリューが現れていた。

ランディが舌打ちする。

「チッ……そういうことか。さつきの雄叫びで、仲間を呼びやがったな?!」

「ど、どうするの、ロイド?!」

エリイが拳銃を構えつつ尋ねてきた。

「時間稼いで、逃走するか？」

いや、ロイドたちはともかく、一般人であるセシルたちが、何セルジュも魔獣から走つて逃げるなんて、無理だ。

「俺たちが逃げるわけにはいかない……ここで倒すしかないんだ……!!」

「そ、そうよね……」

「へへ！ とつと終わらせようぜ！」

ランディが空元氣で鼓舞する。

ティオがうなずいた。

「こんなところで……負けるわけには、いきません……」



リーシャは、バスに乗っていた人たちや、シュリを連れて街道を走っていた。しかし、一般人の研修医や運転手は、早くもバテはじめている。

セシルだけは気丈に振る舞っているものの、彼女とて限界は近いだろう。なにより、嫌な予感が消えていない。

(本当に危ないのは、こちらではなく……やっぱり、ロイドさんたち……)

「ちょっと休憩を入れましょう」

リーシャの声に、ふはあ～と男ふたりがへたりこんだ。

シュリが不満そうに嘆く。

「かあ～！ だらしないな！」

研修医のリットンが、息も絶え絶えに返す。

「ぜえ、ぜえ……そ、そう言わないでくれよ……僕はデスクワークのほうが得意なんだ……はあ、はあ……」

「わ、私も……持病の腰痛が……ううう……すみませんね、お客様……」

運転手のほうも、これ以上は走れそうになかった。

戦闘の音が聞こえないくらいには離れたし、特務支援課が魔獣を退治できれば、充分に安全だとは思うが……

おそらく、それこそが難しい。

(あの魔獣は、今のロイドさんたちでは……気配もひとつじやなかつたし……)

助けに行かなれば！

「あの、みなさん、ここで待っていてください。動けるようなら、できるだけクロスベルのほうへ」

シュリが目を丸くする。

「え？ リーシャ姉、どうする気だよ？」

「私は、ロイドさんたちの様子を見てくるわ」

「なつ!? なに言ってんだよ!?」

「ごめんなさい、シュリちゃん……だけど、私、行かなくてはいけないから……」

「意味わかんないよ！」

唐突に、セシルが駆け寄ってきた。

リーシャは手を取られ、ぎゅつ、と両手で握られる。

「な、なんですか、セシルさん？」

「そう……そうなのね……リーシャさん……」

「えつ!?」

「今まで、気づかなかつたけれど、あなたは……」

セシルが真剣な瞳で見つめてくる。

（ま、まさか……私が『銀』だとバレた!? ううん、いくらなんでも、そこまでは無理よね……でも戦える力を持つてることは気づかれたのかも？ そういうば、この人は、イリアさんの親友だったつけ……）

セシルを紹介したとき、イリアは笑って言つたものだ。

「有能かと思えば天然で、生真面目かと思えば意外と話せる。そして、いざというときには鋭くて、よく助けてもらつたものだわ」と。

それは、日曜学校での話だったが、あのイリア・プラティエが“鋭い”と評したのだ。

ウルスラ病院でも、若くして看護師チーフを任せていると聞く。

「ううう……」

（よりもよつて、ロイドさんのお姉さんで、イリアさんの親友である、この人に見抜かれてしまうなんて……）

しかし、まだ確信はないはず。

誤魔化せるかもしれない。

「あ、あの、なにを感じられたか、わかりませんけど……私は、べつに……」「いいのよ、隠さなくとも。さつきの表情を見て、確信したわ」

「そんな!?」

リーシャは声から体格まで変えて、変装することができる。

演劇をはじめてからは、さらに磨きがかかつたと自負していた。

（毎朝、鏡の前で表情の練習までしてゐるのに！）

セシルが微笑む。

「ぜんぶ、わかつたわ、リーシャさん」

「くつ……どうやら、セシルさんには……き、気づかれてしまつたようですね……」

声が震えた。

シユリが見つめている。

研修医や運転手が聞いている。

アルカンシェルでの日々を思い出して。

失われる光を想い。

涙がこぼれそうになる。

「わ、私は……ロ、ロイドさんが……」

——ロイドたち特務支援課が追つている、《黒月》^{（ハイユエ）}の協力者。東方人街の魔人。伝説の凶手。

《銀》^{（イン）}

「リーシャさん、ロイドとお付き合いしてるのは!?」

「…………は?」

セシルが乙女な瞳をキラキラさせていた。

「さつきの表情を見て、ピン！ ときたのよ。あれは、恋人を想う顔だつて」

「い、いえ……あの……」

「ロイドもリーシャさんも、ひと言くらい教えてくれればいいのに。あつ、それとも、最近、お付き合いするようになつたのかしら?」

「ちよつ……セシルさん……?」

「ああ、そうだわ！ リーシャさんは、アルカンシェルのスターだもの。男性とお付き合いでだなんて、絶対に知られたらいけないのよね!?」

「まあ、仮に、恋人ができたとしたら……劇団長に相談して公表するタイミングは選ぶと思ひますけど……つて、どうして、そういう話になつてるんですか!?」
「いいのよ！ ゼンぶ、わかつたから！ ごめんなさい、私が軽率だつたわね。これからは、影ながら応援させてもらうわ！」

もう彼女のなかでは、リーシャはロイドと秘密の関係にあるらしかった。

イリアが聞いたら、脚本のネタとして喜びそうだが。

(ああ……そいえば……イリアさんから『天然』とも評されていましたね、セシルさん)
脱力してリーシャは肩を落とした。この疲労感は、マインツ山道を登つてきたよりも酷い。

シユリが顔を真っ赤にして、拳を握っていた。

「リーシャ姉！ そつだつたのかよ！ オレにもナイショだつたなんて！ あ、でも、イリアさんは知つてるんだろ!?」
「はあ……シユリちゃんまで……」

「あんなやつに、リーシャ姉はもつたいないって思うけど！ でも、ほ、他のヤツよりはマシだし……オレ、反対しないから……」
「あ、うん……そつか……」

リーシャだって、ロイドのことは憎からず想つているが、恋人になつたわけでもないの

に、応援されたり、認められたりしても――

とつても切ない。

すごく恥ずかしい。

わりとみじめ。

しかし、ここで誤解を解くよりも、利用したほうが話が早そうだ。

(そうよね。私は《銀》――利用できるものはすべて利用する……それだけのことよね。

ううう()

乙女心が痛すぎて、ちょっと涙が出てくるけれど。

リーシャはうなずいた。

「私、ロイドさんのところへ行かないと……わかつてもらえますよね?」

「もちろんだわ! 恋人が応援してくれたら、きっと励みになると思うの。ロイドのこと、よろしくお願ひね!」

「リーシャ姉……幸せになつてくれよな」

「う、うん……行つてきます!」

顔を上気させているセシルとシュリと、ようやく息を整えた男たちに別れを告げて、リーシャは街道を戻る。

セシルたちの視界から隠れた。



黒衣の男が、大地を蹴つた。



「だあああああツ！ タイガアーネーチヤーーージツ!!」

口イトは必殺技を叫びこんだ

卷之三

「うわあ、やばい！」
絶叫をあげて、目が剥き出る。三体の魔獣が爪を光らせていた。

多くの攻撃を受け止めながら勝

毒に犯されてエリイの顔色が青ざめている。

ロイドは渾身の大技で、なんとか一體を倒したものの、残る三体を相手にするだけの余力は、もう残っていなかつた。

「へい……、なんど、ひろで……」

負けられるものか！

武器を握る手に力を込める

「無羨^{ミクニ}」

なつ！？

批評向

黒衣をまとい、顔を仮面に隠している。 街道をまたぐ形で吊り橋がかかっている。その支柱の上に、人影があつた。

歪められた声と、強烈な威圧感。

「えへ、へへ……やせこや、ロイド……んなじや……」

エリイとティオも武器を構えるが、戦う力など残っていなかつた。

「ううう……」

ロイドには言い返すことができなかつた。

銀イシが殺意を放つ。

「……まとめて、始末してくれる!!」

——どれほど強大な相手でも……俺たちは絶対に諦めない！

口イトは歯を食いしはる

銀が飛び上がつた。

「我が舞は、
夢幻……去り逝く者への手向け……眠れ、銀の光に抱かれ……縛ツ!!」

両手から幾本もの鉤が伸びる

「ギヨノ?」

「ギュルツ!?

悲鳴をあげ、身

黒衣の男がローブ下から、巨大で幅広な刀を取り出した。

景が走る
だいとう

大刀が強烈な皮を裂き、銀が裂帛の気合いを放つ。

「「「ギュアアアアア～～～!!」」」

魔獸たちが絶叫した。

次々と倒れ伏す。

ロイドは自らの身体を確かめる。グランドリューとの戦いで負った傷はあるが、それだけだった。

「俺たちを……攻撃しなかつた……のか？」

相変わらず高い場所から、黒衣の男が言つた。

助にられた？

ロイドは問いただす。

「どういうつもりだ!?」
山道なんかに!?」

それに、どうして
《黒月》^{（ハイユウエイ）}に雇われているはずの銀が、マインツ

「しかも、徒歩で……？」

「そ、それは……」

「それは……!?」

「……ハイキングだから」

「ん？ なんだって？」

わずかに沈黙があつた。

「今、お前たちに教える必要は、ない」

銀^{イン}が背を向けた。

「どこへ行くつもりだ!?」

「フ……この場で、お前たちを始末するのは簡単だが……手負いを倒すほど退屈なことはない……私を捕らえたいのであれば、せいぜい強くなることだ」

「ま、待て！」

ロイドの声も虚しく、黒衣の男は姿を消してしまった。

魔獸は消え、銀^{イン}もいなくなつた。

「くつ……」

気を張っていたロイドだが、戦いが終わつた途端、痛みに膝をついてしまつた。

「大丈夫か、ロイド!?」

「あ、ああ……ランディこそ……」

「へッ、俺は氣力を溜めてたのさ。ヤツが近づいてきたら、一撃かましてやるつもりだったんだがな。逃げられちまつたか」

軽口を叩く彼に、ロイドは笑いかけた。

ティオがエリイの毒を除去する魔法^{アーツ}を使う。

「ふう……どうですか、エリイさん？」

「ありがとう、ティオちゃん」

「それにしても、銀^{イン}の目的はいつたい……あれでは、まるで、わたしたちを助けに来たようなものですが……？」

「不思議ね。伝説の暗殺者とまでいわれた銀^{イン}が、とくに用もないのに私たちを助けるとは考えにくいけど……」

「妙ですね……」

エリイとティオがそろつて首をかしげた。

ロイドは立ちあがり、武器をしまう。

「よし……ひとまず、セシル姉たちと合流しよう

うん、と仲間たちがうなずいた。

ロイドたちはクロスベル方面へと急いだ。

戦いになる前に休んでいた、見晴らしのいい場所まで戻ると、そこにセシルたちが待っていた。

リーシャ、シュリと、研修医のリットンとバスの運転手もいる。

セシルが手を振る。

「ロイド～!!」

「セシル姉、無事だったんだね！」

急いで駆け寄った。

「ええ、ロイドとみなさんのおかげね……ありがとうございます」

「俺も他の人に助けられたんだけど……なんにしても、よかつたよ」

ロイドは心から全員の無事を喜んだ。

ティオが、「エニグマで、クロスベルに連絡しておきました。しばらくすれば、救護車が来ると思います」と告げた。

エリイとランディがため息をつく。

リットンが天に向かって感謝の言葉をならべたてた。

「おお、女神さま、ありがとうございます！ 助かった～」

運転手が怖々と訊いてくる。

「す、すみません……あの大型の魔獣は、どうなったんですかね？」

「一体は俺が仕留めましたけど……他の三体は、通りがかりの銀^{イシ}が倒してくれたんです」

リーシャがすごく驚いた顔をする。

「銀^{イシ}……って、あの銀が現れたんですか!?」

「ああ」

「インってなんだ？」

そういえば、シュリは前の事件のときは、まだアルカンシェルに在籍していなかった。

「東方人街の魔人なんて呼ばれてる伝説の暗殺者らしいんだけどな」

「悪いヤツなのか!?」

「クロスベルでは、まだ大きな事件を起こしてないけど……放つてはおけない相手であることは確かだよ」

「そんなヤツが、通りがかつて助けてくれるなんて、変じやね？」

シユリの疑問は当然だ。

ロイドたちも感じていた。

ぱたぱた、とリーシャが手を左右に振る。

「き、きっと、なにか事情があつたんじゃないでしょうか？ 本人に聞いてみないと、正

解なんてわかりませんし……深く考えても仕方がありませんよ」

「そうだな……」

ロイドがうなずくと、なぜかリーシャが吐息をついた。

セシルが、じっと見つめてくる。

「ロイド、リーシャさんは、どういう関係なの？」

「え？　まさかセシル姉、また勘違いしてんじゃない……俺とリーシャは無関係というか……知人……いや、友人くらいだと思うよ」

「あ、あはは……」

リーシャが複雑な笑みを浮かべた。

セシルは不服そうだ。

「さつき、リーシャさんはロイドたちの応援に行つたのではなかつたの？」

「いえ、何度も説明しているとおり、戦いの様子を見に行つたんです……で、でも、怖くて近くまで行けなくて……」

「そうだったのか」

ロイドは冷や汗をかいた。あのグランドリューと戦っているとき、リーシャが来ていたら守る余裕はなかつた。

シリが明るい表情を見せる。

「ははっ！　まあ、そんなこつたろうと思つたぜ。おまえなんかに、リーシャ姉はもつたいなさすぎるもんな！」

「俺だって、そんなに大それたことは、考えたこともないよ」

ロイドは苦笑する。

リーシャが首を左右に振つた。

「そんな！　私なんて普通ですから、ロイドさんと不釣り合いなんてこと……あつ！　そ、そういう意味ではなく……!!」

「はは……ありがとう、リーシャ。そんなふうに言つてもらえるなんてうれしいよ」

「あ、う……」

リーシャは耳まで赤くなつていて。

ロイドはうなずく。

「たしかに、俺たちの間で上とか下とか言うのも変な話だな。これからもよろしく頼む」

「……はい」

「どうやら恋人という仲ではないらしい、と納得してセシルは、ため息をついた。しかし、友人を得たことは喜んでくれているようだ。

シリが、ロイドとリーシャの間に割り込んで、ベタベタすんなよーと邪魔をする。

エリイとティオが、いつもの調子でジト目になつていた。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント! ※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ <http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/>

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp)まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.179プレゼント係



1 : お名前（ペンネーム可）

2 : 面白かった記事の番号→
つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3 : アンケート①2025年のファルコムで一番印象に残っている
ことは?
アンケート②『空の軌跡 the 2nd』発売決定についての感想
は?

4 : 希望するプレゼント番号

5 : ご意見・ご感想など

記事一覧

- 1:『空の軌跡 the 2nd』特集
- 2:も～っと集まれ！ ファルコム学園
- 3:ファルコムニュース
- 4:英雄伝説 空の軌跡
- 5:啄木鳥しんきのファルコム日和
- 6:英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り

1月26日(月)

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

「はあ……あんなこと言つて、自覚がないなんて……」
「……まあ、天然ですから」

バスの運転手が、街道の先を指さす。

「救護車だ！ お～～い！」

「おお、お助け～!!」

ずっと女神様に感謝を述べていたリットンが、両手をぶんぶん振りたくる。

ランディが荷物を担いだ。

「おっし！ 行くか」

「ああ、戻ろう、クロスベルに！」

ロイドの言葉に、みんながうなずいた。

（ふう……）

リーシャは安堵の吐息をついた。

みんなが救護車へと乗りこんでいくのを一番後ろで眺める。
ロイドたちの言動から、疑われている様子はなかつた。
証拠など残していないはず。

そつとリーシャはつぶやくのだった。

「…………大丈夫。バレてない…………よね？」

月刊

FALCOM

MAGAZINE

Vol. 179

発行人 田中一寿

発行協力 日本ファルコム株式会社

編集 小渕智幸
河野崇

デザイン・DTP 株式会社 ACQUA

表紙ロゴデザイン 荻窪裕司（デザインクロッパー）

発行 株式会社フィールドワイ
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9 日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
<http://www.field-y.co.jp/>

Copyright ©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved.
©2025 FIELD-Y
©SHINKI KITSUTSUKI 2025
©DAISUKE ARAKUBO 2025